

日本人の性格の起源についての発達・臨床心理学的研究（Ⅱ）

— 日本人の宗教観についての考察 —

山 添 正 *

1. 「現代宗教」への批判

日本人と宗教を考える前に、この問題を考える手がかりとして筆者が身近に会った経験をお話することから始めようと思う。

「事例1」

非行に走る子どもさんを抱えている親からあるときこんなお話をお聞きしました。「この子は神から授かった子と思うと、一切のこの子への憎しみが消えてしまうのが不思議でした。先祖にお願いしても心は治まりません。むしろあの世の平安を乱してしまうようで、天の本当の神さん、阿弥陀さんかキリストのような一神教のようなはっきりと救済してくれる神を想像しないと落ちつきません。原因（何で彼が非行になったか）を考えていると、夫婦喧嘩に発展するし、子供時代のかわいい姿を想像していると悲しくてどうしようもなくなる。日本の神様はハッキリしなくて（言葉がない）何の救いにもならない」

「事例2」

筆者は、スイスのユング研究所へ留学するとき、提出書類に「Religion」の欄があり「無宗教」と書こうとしたら「Buddhist」と書くようにある先生に注意された。ただ「Buddhist」と書くのはいいが「仏教とはどんな宗教か」と聞かれたら困るという気持ちがあった。このことは、留学以来ずっと気になっていた。筆者の主観的感覚は「無宗教」がびったり来る。ところが、西洋人にとすると「無宗教」は、信じがたい事だというのが理解できなかった。

「事例3」

また昨年筆者の父が亡くなったが、父の生まれ故郷とはかけ離れた、滋賀県という異郷の地でなくなったため、実家は真言宗であるが父は「宗派は問わない」と言って、密葬は浄土真宗の僧侶のかたにお願いした。空海に深く帰依していた父にしては意外な言葉のように筆者には思われた。ただ、人格的な尊敬の念が起こらない檀家寺の住職を批判していたのでその意味では分かるような気もするのですが。その父も戒名には執着した。「本尊の空海の絵を（自分が描いてお寺の本尊になっている）寄進した時、『何かお礼を』ということで、住職より『生前に戒名を授けます』との約束があった」といい「あの約束を忘れていたのではないかと催促したので、住職に会いに行った。住職によると「忘れていないですが、あまりはやくお渡しして、亡くなられたりすると私の責任のようになっては困るので」と苦笑しながら筆者に語った。父は戒名を恭しくいただき、日ごろの住職批判は忘れたかのように「戒名は人生の卒業証書や。ああこれで思い残すことはない」といつ死んでもよいと言うようなことをいった。

「事例4」

また筆者の心理学の恩師の一人は「俺は大正デモクラシーの中で育ち、近代合理的個人主義の考えを持っているので、宗教は嫌いだ」と言ってキリスト教も仏教も拒否し、葬式も拒否した。しかし、「墓を作っても、家族がお参りにきてくれるのは50年。俺を知らない代になったら誰も来ない。だから50年分の供養代をお寺に払った。要するに残った家族に迷惑をかけたくない」と言っていた。

ところで、この3人に共通するのは、「宗教批判」であると筆者には思われる。もう少し正確に言うと「現在の日本の宗教のあり方に対する現代日本人からの批判」であると言ってよいように思われる。しかし「日本の宗教は頼りない」「宗派を問わない」「葬式を拒否」と3人のとる行動は異なっても宗教そのものの否定とは思われない。つまり「戒名にこだわる心」「墓を建てて供養を心配する心」は、「無宗教」とは少し違うように思う。最初の、非行児を抱える母親と関わっていると、日本の宗教の現状は、必ずしも現代人の宗教的要求を満足させていないように思われる。非行児を抱える母の言葉からは、宗教は必要でありしかも「救い」をもたらすものが必要だと感じる。したがってこのようなケースと接していると、フロイトの次のような言葉を思い出さざるを得ない。

「人間とは、一般に宗教的幻想の慰謝を欠くことが出来ないものであって、これなくしては、生活の重荷や現実の呵責なさには耐えられないのである」¹⁾

2. 創唱宗教と自然宗教

ところで「宗教批判」とはいうがそもそも「宗教」とはなになのか。そのことを分らずして「宗教批判」と言っても始まらないような気がする。事例1は、日本の宗教は神のイメージが明確でないといっている。事例2は、無宗教であることが自分の宗教であるといっている。事例3は、葬式仏教への批判が住職への人格的批判となっている。事例4は、葬式仏教に堕した、個人主義を抑圧するものとして宗教を拒否している。事例4つとも宗教の捉え方がバラバラである。事例1にしても日本の宗教と言うがどんな宗教かは聞いていない。

これではとっかかりがないので、いったい宗教をどのように考えればいいのか。まず筆者自身のことから考えてみよう。事例2のところで書いたように、筆者は、10年前スイスのユング研究所へ

の留学手続きをとるとき「宗教」の欄があった。ある先生より「無宗教と書いてはいけない」と言われていたので、「Buddhist」と書いた。仏教とは書いたものの、「教義は何か?」「どんな戒律を守っているのか?」等質問されたら困ると思った。それが、自分の宗教を他者に向かって説明する必要を感じた最初かもしれません。

「仏教」とは書いたものの、筆者の住んでいる湖北地方独特の「おこない」という神道行事にも出ている。正しくは「仏教・神道」とするのが正しいのではないか。しかし西洋人の目から見れば「2つの宗教を信じている」のはおかしいかもしれない。また、筆者は真言宗の家系に育ち、地藏信仰と弘法大師信仰に親しんで大きくなってきた。それは父が強い空海への尊敬の念を持っていたからである。しかしその父も、故郷から遠く離れた所で亡くなる事を覚悟した後、前述した住職批判だけでなく介護の人の手間を心配して、葬式の時の「宗派は問わない」といって、地元の浄土真宗の僧侶にお願いして葬式が執り行なわれた。

こうみてくると自分の事を振り返っても、日本人の「宗教」という言葉の捉え方は混沌としている。ただ「宗教批判」というときの「宗教」は、現代の日本の宗教の現実を現代日本人がとらえた表現であるように思われる。

こうした疑問を持っていたとき、1997年3月にNHKの「未来潮流」と言う番組で「宗教学者阿満利磨が問う。無宗教日本のゆくえ」と言う番組が、阿満の著書「日本人はなぜ無宗教なのか」というベストセラーの本をもとにして作成され報道された。この番組と阿満の著作を読みこれまで筆者が疑問に思っていたことが多く解決された。筆者の疑問がどのように解決されたかを説明したのがこの論文である。筆者の疑問は、多くの日本人の疑問であると思うし、その解決は今後各自が宗教の問題を考える糸口になればという思いでこの論文を書いた。

阿満はまず以下のように「自然宗教」と「創唱宗教」の区別から日本人の宗教意識のありかたを明らかにしていく。

「私は、かねてから『自然宗教』と『創唱宗教』の区別が日本人の宗教心を分析する上では有効だと考えている。創唱宗教とは、特定の人物が特定の教義を唱えてそれを信じる人がいる宗教のことである。教祖と教典、それに教団の3者によって成り立っている宗教といかえてよい。代表的な例は、キリスト教や仏教、イスラム教であり、いわゆる新興宗教もその類に属する。これに対して自然宗教とは、文字通り、いつ、だれによっても定められたかも分からない、自然発生的な宗教のことである。一中略— あくまで（自然宗教は）創唱宗教に比べての用語であり、その発生が、自然的で特定の教祖によるものではないということである。あくまでも自然に発生し、無意識に先祖達によって受け継がれ、今に続いてきた宗教のことである」²⁾

この解説によると、事例1の解釈は、自然宗教にたいする不満を表明しているのであり、逆にキリスト教などの創唱宗教への期待を表明していることになる。事例2は、自然宗教は宗教でないと考えており、裏返すと創唱宗教だけが宗教と呼ぶにふさわしいと考えているのである。事例3と4はいずれも大正生まれの人の考えで、葬式仏教は宗教でないと考えている。しかし自然宗教まで否定したものではない。むしろ自然宗教こそ自分にふさわしいと考えている。つまり両者とも葬式は重要視しないが、墓の問題は容認している。

以上整理すると、事例1と事例2は昭和生まれで、自然宗教に否定的で、創唱宗教こそ宗教だと考えている。いっぽう大正生まれの2人は、創唱宗教つまり既成の日本の宗教団体とそれを担う僧侶に対する批判が葬式の軽視・もしくは否定の考えにつながっていると思われる。両者とも大正デモクラシーを生きた人らしく「人間死んだらお仕舞い」と「合理的考え」を筆者に披瀝している。前者は創唱宗教に共感し、後者は自然宗教へ回帰しようとしている。向きは全く異なるが、同じ日本人の宗教意識と行動を示している。

3. 創唱宗教の「内」と「外」への分断

阿満は、日本人の「無宗教」発言の背景にある「瘦せた宗教観」を、明治維新以後の日本の近代国家建設の過程を歴史的に振り返りながら巨視的に考察している。³⁾

長くなるが、阿満の意見を以下に、著者の提唱する日本人の自我モデルと人格発達の受動性⁴⁾に関連するところを中心に引用してみたい。

阿満は、現代日本人の宗教観を語る上で、井上毅の宗教思想家としての役割に注目している。筆者には、井上毅の外交官のイメージはある。しかし、思想家と言うのは意外な気がした。

「キリシタン解禁にともなう、キリスト教の進出に際して、国家はどのように対処すればよいかが、廃仏棄釈に次いで、明治維新政府が当面した課題であった。それに対して意見を求められた一人に、井上毅がいる。井上毅はのちに『大日本帝国憲法』や『教育勅語』の実質的な執筆者になる事からも分かるように、明治国家の中枢にあって、その重要な政策の決定に係わってきた人物である」⁵⁾

例によって、日本人の改革は外圧によって進行する。これは教科書的知識ではあるが、明治政府は近代国家へ発展する際の障害になる、幕末に結ばれた種々の不平等条約の改正を行おうとしたが、本国でのキリシタン弾圧を指摘され、1873年キリシタン禁制を解かざるを得ない状況に追い詰められる。その前年井上毅は、キリスト教制限に関する意見書を太政官当局に提出している。井上毅は、解禁するための方策の選択肢は3つあるとしている。

「第一は、キリスト教の全面禁止。しかし、これは列強から激しく非難されていることであり続行は不可能である。第二は、キリスト教の信仰、布教の自由を全面的に認める。四方八方より宣教師が押し寄せてきて、信者の分捕りあいとなり、

挙げ句は、流血の惨事を招く恐れがあるから採用しないほうがよい。第三は、キリスト教を信者個人がこころの中で信じることは許すが、布教活動などは認めないというものであった」⁶⁾

井上毅によれば、キリストの信仰は、個人のこころのなかに止めておく場合にのみ許されるが、布教などの社会的行為は、全面的に禁止するというわけである。このように、宗教を「内」（個人の内面）と「外」（布教活動）に分けて「内」の部分だけを宗教の正統と見なす考え方は、現在日本人のみならず、当時の知識人に共通した見方であった。阿満はオウム事件にも触れ、「多くの人々が、宗教は社会の秩序を乱すものであってはならないと力説した」現代日本人の宗教観の背景に、前述した井上毅たち、明治の政治家たちによる、宗教の政治的解釈が存在していたことをみている。⁷⁾ これは筆者の言う自我機能モデルの「自→他」チャンネルの抑圧を意味し、現代日本人の自我機能が「自←他」のチャンネルが優位になっている発生の起源のように思われる。外から与えられる課題の受動的遂行には優れているが、自らアイデアを出して改革する能動的チャンネルが劣等なのは歴史的起源があるように思われる。

4. 「自然宗教」の国家による破壊

「日本人の信仰は雑多で曖昧だとは、よく耳にすることだが、果してそうであろうか。私の見るところ、雑多で曖昧になったのは、明治以後、明治天皇を中心とする国家神道が勢いをえてからのように思われる」⁸⁾

日本の自然宗教は「天皇崇拜」のシステムによって破壊されたというのが、阿満の主張である。ところで、自然宗教が破壊されたというのはそれはどういうことなのだろうか。つまり破壊される以前の自然宗教の姿とはどのようなものであったのだろうか。

「日本人は身近で親しみのあるカミから、そのカミを通じて、霊力の強い神仏につらなり、さらにもっと遠くの、しかしいっそう強力な霊威に服する、といった信仰の段階を組み合わせで暮らしてきたのである。難しくいえば、普遍と特殊の組み合わせということになる」⁹⁾「神と仏の関係も同じである。神々には、この世のことを願い、仏たちには、神々の導きによって、あの世や来世のことを願うという暮らしをしてきた。そこには、神仏の間で一種の棲み分けがあったといってもよいだろう」¹⁰⁾

「普遍」と「特殊」、「神」と「仏」の棲み分けの共存の世界が、阿満によると「天皇崇拜」という明治維新政府がめざした天皇中心の政治体制構築の中で破壊されてしまったことが、今日の日本人の結局は「無宗教」といってはばからない、「瘦せた宗教」意識を生み出してしまったことになる。歴史的に言えば「廃仏毀釈」といわれる現象を生んだ「神仏判然令」「神社合祀令」がその具体的政策であったという。

「この段階で、仏は神という手足を失うことになり、現世でどのように活動すればよいか分がなくなった。神も、それまで仏にまかせていた、来世の保証という領域を引受ねばならなくなった。しかし、伝来の分業が廃止されたあとの、このような課題は、神仏ともに、ついに今に至るまで十分な解決を見るにいたってはいない」¹¹⁾

こうした神道、仏教のあいまいな問題解決のうちに、欧米文化偏重の影響によって、キリスト教をモデルとする宗教観が広がり、自然宗教という日本古来の生活に即した宗教論の展開が妨げられることになった。いわゆる第2節で分析した「創唱宗教」だけが宗教であり、「自然宗教」は宗教でないか、程度の低い宗教であるという風潮が広がり今日に至っているのである。

「そして宗教に関しては、無宗教を標榜し続け

るようになったのである。無宗教は、近代日本の状況にあっては、明らかに身の安全を保障する言葉であったのだ。その上、近代は科学の時代でもあった。科学的で合理的な世界の見方が強く支持され、宗教は、怪しげものと見なされがちとなり、人々はますます無宗教を標榜することになった。だが、人間が、どこから来てどこへ行くのか分からない存在である以上、しかも、その人生になんらかの意味を見いださないかぎり、人は生きていくこともできない存在である以上、人間と人生に究極的な意味を与える知恵、つまり宗教は、どうしても必要になってくる。そうした願望に、できるだけ多くの選択肢を与えることができる環境こそ、人生の豊かさを決めることになるのではないか。そのとき無宗教を標榜するだけの選択しかないということは、あまりにも淋しい人生ではないだろうか。近代日本はそのような淋しい選択を選んだ時代なのであった¹²⁾

「自然宗教は宗教でないか、程度の低い宗教である」この意識は戦後生まれの筆者の世代には強いように思われる。こうしてみると、明治期に否定された日本の伝統宗教が、さらに戦後教育で、日本の伝統をすべて天皇制のもとに否定してきたため我々の意識の中には「日本の伝統＝封建的＝劣等なもの」というような図式ができあがってしまっていて、自然宗教を評価する価値観が育っていないように思われるし、「本当の日本の伝統」が、沖縄とアイヌ以外天皇制のもとでゆがめられてしか伝わっていないとするなら大変不幸なことである。自然宗教は、宗教でないと思い込んで、筆者の世代は宗教を徹底的に、本来の姿を追求する形で模索するか、創唱宗教に走るしかなくなってしまう。オウムが多くの若者を引きつけるのもこうした歴史が背景にあることが一つかもしれない。

5. 「豊かな宗教観」の試み

いったいどうすればいいのかと言うのが筆者の

疑問である。父親が拒否した宗教家が僧侶が多いことは事実であるし、尊敬できる宗教家はどこであえるのか。またまた筆者の頭をよぎるのは、やはり本当の宗教家とは、そもそも日本にいたのかという疑問である。また、本当の宗教家というのはどのような人と言うのか。

「宗教といえば、苦しいときの神頼み、つまり商売繁盛や病氣直し、受験祈願といった自分に都合のよい欲望追求の営みだと考えるのも、宗教観の貧困を物語っている。宗教観が痩せているということは、人間についての見方が浅いということになる。人間について浅い見方しかできないと、人間が引き起こす深くて巨大な問題に、お手上げになってしまう¹³⁾

阿満は、豊かな宗教の実戦を試みた人物として東本願寺の一部の人や、大逆事件に関心を持っている人を除いて、知る人のない高木顕明を紹介する。

「彼が赴任した寺院には被差別部落の門徒が多く、彼はその人たちの苦しい生活に深く共感して、その解放を己の使命とした。また日露戦争にたいしては、明確な非戦論を主張した。あるいは、強固な廃娼論者でもあった。高木顕明がこのような姿勢を貫いたのは、ひとえに阿弥陀仏の心を己が心とするという宗教的信念による。阿弥陀仏の慈悲は、悪人善人、貧富、男女、老若を越えて平等に注がれるものである以上、阿弥陀仏の信奉者は、現実の差別に無関心ではおれないし、その差別の克服に身を捧げることは当然だと考える¹⁴⁾

当時の彼の赴任先の仏教会では、この高木顕明の主張を支持するものは皆無であった。わずかのクリスチャンや社会主義者との交流が彼を支えた。その交流が彼を、「大逆事件」に巻き込んだ。

「高木顕明は、その熱心な阿弥陀仏への信仰ゆえに捕らわれ、死刑こそ免れたが無期懲役の苦し

みのなかで、ついに秋田の監獄で縊死するに及んだ。高木顕明における宗教的信念は、決して個人の私事、内面にとどまるものではなかった。国家が設けた内と外という枠を越えて溢れ出るだけの、強いエネルギーをもっていった。それが、宗教的信念というものの在り方なのである」¹⁵⁾

「枠を越えて溢れ出るだけの強いエネルギー」これが宗教的信念であるという。この言葉に筆者は深く感動した。筆者は前著で「自←他」のようにいつも他人の思惑を気にしている日本人の人格発達の問題点を考察してきた。そして何故これほどまでに徹底して受動的人格を生きねばならないのか疑問を呈した。その原因の一つにこれまでの日本の宗教家に責任があるように思った。日本の歴史の中で鎌倉期の宗教家をのぞいて、日本の宗教家がいつも保守的役割を果たしてきたことである。言い換えると世俗権力である天皇、貴族、武士の政治に異議を唱えなかったと言うことである。

筆者が、1998年の夏エジンバラでスコットランドの宗教教育家と議論しているとき、彼は筆者にこのように言った。「我々は孤独になったときキリストに返る。あなた方は、孤立したとき仏陀に返れば安心を得るではないか。したがって、言うべき事は自由に言う必要がある。特に宗教家は、世俗を超える超越者つまり神が味方してくれているのだからなにもおそれる必要はありません。日本人は、批判されて孤立すると何故沈黙するのか」と神の問題と言論の自由、自己主張の問題をこのように語った。それに対して筆者は「日本人は安心を求める前に、まず孤立することをおそれる」と主張し、いかに他人の思惑を気にする「自←他」のチャンネルにとらわれているかを説明した。「キリストに返れば安心を得る」とは、なんと神が生き生きと生きている事かと思った。また阿満の「枠を越えて溢れ出るだけの強いエネルギー」はまさに「自→他」の能動的チャンネルの働きを表し、我々を元気にしてくれる。高木顕明の存在は、尾西市の若手宗教家の「太平洋戦争と宗教家」の問題を検証しているグループを通して知ってい

たが、筆者にとって宗教家への人格的尊敬を感じさせる人である。「やせた宗教」から「豊かな宗教」は、こうした歴史の検証の中から発生してくるのだろうか。そう考えれば、心理学者も歴史の勉強が必要になってくる。

6. 日本人の宗教シンボル

死者の鎮魂慰霊は宗教の大きな役目である。また生きている人間の死への不安をどのように克服するかはまた大きな問題である。宗教に対するまたは宗教家に対する尊敬をもてるようになったつぎは、現代の日本人の宗教行動と具体的に関係する日本人の宗教シンボルに関わる問題の考察に入ろう。

「死者に対する恐怖心からの解放ということについては、一言説明をしておく必要がある。古代の日本人は仏教を受け入れるまでは、死後の世界について、明白な見通しをもっていなかった。死は恐ろしいものであり、死者は多くの場合、現世に生きているものに祟りを及ぼす恐ろしいものと考えられていた。いわば、死者の扱いに窮していた古代日本人にとって、こうした中国経由の仏教が持つ、死者祭礼の儀礼や死後の国のイメージは、魅力的であり、仏教は、何よりもまず、死者の鎮魂慰霊の呪術、あるいは死後の世界を保証する教えとして、普及することになった」¹⁶⁾

ところで筆者の「死後の世界」のイメージというと、幼児期に受けた地藏信仰を述べねばならない。筆者は、地藏信仰とも言うべき「宗教」の早期教育を受けた。筆者は子どものころより、地藏を身近に感じて育ったので、18年前に山梨に赴任してすぐ、湯村温泉郷の外れにある厄除けで有名な塩沢寺にさっそく参拝に行った。そのとき厄除けのことは知らないでいた。

「事例5」

右手に、錫杖、左手に宝珠、行脚の僧の御姿は

筆者のイメージした通りだが、少しそのいわれがかわっていると思った。このお地蔵さんの耳は、毎年3月13日の正午から翌日の正午までしか開かないと言う。それと厄除けである事が気になった。筆者は小学校6年生まで家の近くにある道辺にあるお地蔵さんに、毎朝、弟と一緒に線香2本持ってお参りに行くのを日課にしていた。母親の指図だった。嫌がると叱られた。筆者の母は、両親を、海難事故で失った。また結婚して自分が母親になったあと子ども2人を失うという喪失体験が続いた。筆者は5人きょうだいの4人目だが、長男が5才のときに池で溺死し、長女は太平洋戦争中の空襲で死亡して両親は2人の子どもを失った。こうした背景を持つ母は、「お地蔵さんは子どもの守り神だから」といって筆者たちをそうさせていた。小学生であった当時、筆者は何故お地蔵さんが子どもの「守り神」なのか分からなかった。ただそのころ母親は、時々仏壇に向かって「賽の河原」のお経をあげ、鐘を叩き「鬼が出てきて子どもをいじめる」ところできまって涙ぐんでいた。その後「お地蔵さんが出てきて子どもを助ける」ところがある。このシーンが「守り神」のイメージとして筆者の印象に残っていたため、あえて母親に質問はしなかった。もう一つ、説明らしい説明と言え「お地蔵さんを信じていたらいつでも、どこでも助けにきてくれる」と母親は、日課を欠かすときはそんな言い方をして筆者たちを励ましていた。「だから、どこでもいけるように旅の姿をしてられる」ともいっていた。

当時は、そんなことよりも、地蔵盆のときはお菓子がもらえとか、とにかく日課をはたしていると母親の機嫌がいいので線香をもって通っていたように思う。母親の課した日課を果たすうち、筆者はお地蔵さんといえば、子どもの「守り神」で、いつでもどこでも自分をまもってくれるという考えを漠然と持っていた。

以上のような先入観があったので「厄除け」とか特定の日しか耳を開かないといういわれを聞いた時変な気がした。失礼な言い方ではあるが、筆者の中にある地蔵さんと違って「けちだな」と思っ

た。しかし、考えてみれば、子ども時代は子どもの「守り神」のお地蔵さんに頼って大きくなり、今また「厄」の年には、「厄除け」のお地蔵さんに助けてもらえるのかと思うと「けち」などとは罰当たりなことはいえないとおもった。子ども時代も、大人になった今も、助けてもらえると言うことは、結局いつも助けてもらっていることになるからである。

こうした真言宗の流れではあるが、自然宗教に近い土着的な死後の世界の宗教的イメージしか持っていなかった筆者は、阿満の議論にある法然の教えは、基督教に近い1神教的信仰のような印象を受けた。

「だが法然によってはじめられた専修念仏は、同じ念仏であっても、自己の救済実現するものであり、死者の鎮魂慰霊を目的とするものではなかった。阿弥陀仏という仏が、我が名を唱えるものは、いかなる人間であっても自分を浄土に招いて仏にするという、人間にたいしていれば契約を信じて念仏するのが、法然の念仏であり、そのほかの一切の救済手段を拒んで、ひたすら阿弥陀仏の約束にもとづく念仏を専ら唱えるために、専修と呼ばれたのである」¹⁷⁾

死者の鎮魂から自己救済としての宗教までくると、日本人の「やせた宗教」の現実がはっきりするように思われる。法然の宗教観が本来の宗教であるとすると、筆者の観念にある宗教は、ほかの多くの日本人も同じと思うが、それとは隔絶している印象を受ける。

筆者は、日本人の宗教の核は、多くの観音信仰にみるように、やはり「自←他」のチャンネルで「他」より愛を受けること、慈悲、情けを受けること、可愛がられること、好意を受けること、善意を受けることつまり甘えの感情を満たすことにあるように思われる。

少し長くなるが、この問題を発達の視点より考察してみよう。

7. 日本人の「受動的」宗教観

輪廻転生と言う考え方がある。この問題を考えることのおもしろさは、「私」つまり自分の領域の空間的限定と延長または時間的限定と継続性の範囲そして自己を越える対象との無関係性と関係性を考えることの不思議さである意味ではいい加減さにつきあうことになるからである。¹⁸⁾ この問題を、少し長くなるが筆者の子どもとの会話から集めた資料を提供しよう。¹⁹⁾

「事例6」

ある日の夕食後の食卓で、長男が赤ちゃんの時淡路島にいった話になった。2女(5才)が「鮎ちゃん(2女は鮎子という名前)もいったの」と聞くので筆者が、「鮎はまだ生まれていなかった」と答えると、「それじゃあ、鮎ちゃんがまだ琵琶湖の鮎だったときに行ったんだね」と聞いて来た。「早く釣り上げてくれたら、鮎ちゃんも淡路に行けたのに」というので「釣るのが難しかったからね」と筆者は答える。鮎子は琵琶湖の北岸の長浜というところで生まれたので、一般にいわれている、「鮎は琵琶湖の外に出て大きく育つ」という話がある。そういう意味を込めて、実際に鮎子と名付けたので、「鮎子が琵琶湖で泳いでいるとき、お父さんとお母さんが、釣り上げて、それから人間の子になった」というていたが鮎子はまだそのまま信じている。「琵琶湖で泳いでいた頃覚えている」と聞くと、何故かこれには「覚えている」と答える。「気持ちよかったよ」というのである。すると長女がまた、「大きい魚が来ると逃げないといけないでしょう」というと「琵琶湖には大きい魚いないよ」と答える。すると長女も後にひかないで「それじゃあ、群れの中にいたんだ」。

鮎子は水泳が好きなので、普段こんなことをしているせいか、幼稚園の時、プールに連れて行った時に、泳ぎも出来ないのに、深い所へ勝手に行って、そばにいた人に助けてもらったことがあった。ただ魚から鮎子がどう人間の子どもに変わったのか分らない、そこを聞いても「覚えていない」とい

う。「お父さんが、魚を抱えていて、ぱっと落としたら鮎ちゃんになったの」とも聞く。色々考えているようである。

余程魚であった事が気になるようだ。「鮎子が琵琶湖を泳いでいたら、お父さんとお母さんが釣り上げて、夜お皿の上に置いていたら、夜のうちに赤ちゃんになっていたんだね」と繰り返しこの話をする。しかし、色々疑問があるようで、まず一番の疑問は、前述したようにやはり、どういう風に魚から人間に変わったのかそこが納得出来ないようだ。「どうして、魚が鮎ちゃんに変わったの」とよく質問する。

本児は本当に思いがけない角度から質問してくることがある。列举してみると、「神さんは何語話すの」「神さん卵産む」「天使は一杯いるの、どうして人間には見えないの」「どうして、キリストは、大人にたいしても『私の子どもたち』というの」等々、かなり難しい質問も次々出て来るので、困る事が多い。「見えない物を、例えば神さんとか仏さんとか、自分の全人格で本当であると感じとれる」この能力は、子供の方が優れているように思う。

これらは、サンタクロースのお話と通じる子どもらしい空想²⁰⁾の産物で、何の苦労もない子どもたちの他愛もない会話かもしれない。しかし筆者はこの話を、Y医科大学で日夜、人間の生と死と向き合っている医師を相手に「生と死を考える」講演会で引用し、ユングの「エゴからセルフへ」と言う概念²¹⁾を使用して解釈した。冗長だと思ったけれども、輪廻転生を不思議と思わない心性を理解するためには、できるだけ関連する言動を取り上げた方が、理解しやすいと思ったのであえて冗長を省みず引用した。特に魚と「私」の間に、自我境界が引かれないし、万物と一体となる心は日本人が「魂」と呼ぶにふさわしいかもしれない。また「神は何語を話すのか」という質問は、スイスで本児が幼稚園へ通っているとき風疹に罹患し、苦しんでいるとき「いくら日本語で神さんをお願いしても、苦しみがとれない」という言語の異な

る外国の地で発した疑問である。こうしたメンタリティーは、法然の宗教観とはかけ離れているかもしれないが、阿弥陀への絶対的帰依とおなじく、死の不安を超克する日本的自己救済の道かもしれない。以下に別に引用する本児の言葉がなによりも、直接その心理を表現していると思われる。

「人間は死なないんじゃないの」と鮎子。「人間は死ぬの」と長女。「だけど鮎ちゃんは死んでも琵琶湖に帰ってお魚になるよ」。すると長女は、「困った子だ」というような顔をして「人間は死ぬようになっていくの」。すると鮎子は鋒先を変えて「お母さんも死ぬの。それじゃあお父さんお母さんが亡くなった後、御飯作れる」と時々筆者の方におはちがまわってくる。

この話をした後、泌尿器科の医師が「どうすればそのような輪廻転生という不死の信念を現代の日本の大人に思い出させることが可能なんですか」と質問してきた。これは発達の問題でなく宗教の問題かもしれない。それはユング心理学的に言う「エゴからセルフへ」ということができる。エゴを棄てない限り、こうした心境に達しない。

ところで「阿弥陀への絶対帰依」の心理もまた、徹底的なエゴの否定でセルフへの到達をいっているように思われる。それはその修正不変の確固たる信念の体系であるところで、子どもの「親への信頼」と共通するものがあるのかもしれない。なぜならこうしたメンタリティーを持っている子どもを失った親の行動をみていると、彼らの亡くなった最愛の子ども自体が神になっていくケースが日本に多いことにきづかされるからである。そしてその子への呼びかけがその後の親たちの生き甲斐になっていくのである。それは、子どもの「親への無垢の信頼感情」が、今度は子どもを亡くした親の「亡くなった子どもへの敬愛」に変わっていくことにみられる。この親の喪を通して浄化された親の心に残る亡くなった子どもの存在は、その家族の神のような存在になり、あげくはその子に

対して家内安全を願ったりするようになる。それは日本人の神と人間との関係が、他者からの好意を期待する受動的パイプ（自←他）をベースにしていることの証拠である。つまり親の喪による浄化を受けると自＝子、他＝親から自＝親、他＝亡くなった子に日本的なスピリチュアルな変容が起こるからである。それはあたかも「子どもの親への信頼」を絶対化したことであるように思う。それは自分が子どもになり、亡くなった子どもの「信頼感」を自分のものとする作業であるように思われる。この現世の財産・名誉・権勢をすべて否定し、ただ亡くなったわが子をいとおしむこの親の悲哀の作業は、自分を徹底的に否定し尽くし阿弥陀に絶対帰依する宗教的修業にどこか共通するところがあるように筆者には思われる。

8. 日本の子どもの宗教観

前述した輪廻転生の考え方もそうだが、「魂」が遠くに行かないという考えは日本人の宗教観の「現世主義」と関係があると思われる。日本人の宗教観は、現生利益的つまり筆者の言う「自←他」のチャンネル優位で共同体という現実の人間関係に縛り付けられた性格を持ったもので、そこで躓いたときだけ恣意的に共同体を超越した神を拝む「困った時の神だのみ」といわれる。それは、子どもが母に甘えるように神のやさしい面（愛）が強調されて意識されているようにいわれる。筆者の自我機能モデルを使うと、日本人は、「自←他」でこの他者からの善意を受けることに全神経を集中しているといっても良い。したがって日本人は幼い頃よりそのメンタリティーを発達させるので、子どもの時より宗教観も「自←他」のチャンネルで形成されており、神のイメージもそのチャンネルで形成されるものが優位である。一方、筆者の出合ったスイスの子たちのそれは、彼等の行動を日常的に規制する面が強調されているように思った。

スイスに来てから、教会がいたる所にあり、よく目に触れるせいか、子どもたちはよく「神さん」

の事について話しあっていた。その中心はいつも2女の鮎子だった。前述したように、友達のドイツ語が分らないで困って、幼稚園を病気で休んでいる時「お父さん、神さんは何語話すの」と聞きに来た。「こっちの神さんは、日本語分らないのじゃないの」と言って、筆者からすると鮎子の不安が手に取るように分る質問だった。いつも鮎子の質問に答えるのが長女だった。子どもたちは、甲府のキリスト系の幼稚園を卒業し、日曜学校にも通っていたので、特に長女はそこで得た知識を動員して一生懸命話して聞かせる。聞いていると、時々それが大変興味深い事があった。

「事例7」

鮎子（5才）は、自分の名前の由来から自分が「魚であった」と信じているので、スイスの我が家に来る人ごとに「鮎ちゃん魚だったの知ってる」という。その人達はいきなりいわれるので、めんくろうが鮎子のかまわず今も「私は魚だった」といい続けていた。ただ、魚から人間にどう変ったかという所が自分でも分らないようで、鮎子の考えでは、「それは神様が変わった」と思っている。「鮎子が、魚の鮎から、人間になろうとした時、神さんが『子』をつけなさいといったので、人間の『鮎子』になったの」という事は信じているが、ただ母親とのかかわりに関しては「鮎ちゃんは、お母さんが、食べようとした時に、人間の赤ちゃんになったの」「お母さんがその魚をだっこしたら鮎ちゃんになった」と考えが安定せず、自分の中に記憶がないのを自分で不思議がっていた。何故その所だけ記憶を探ろうとするのか分らないが、魚から人間への変化を神さんが媒介していると信じているのはおもしろかった。

この話になると、長女はまたかというような顔をしながら、「鮎子が鮎だったのではなくて、大きな鮎をお父さんが釣り上げたら、その魚のおなかに鮎がいた」と違う説明をしたりしてひやかすが、自分が鮎だった事は信じている。「魚の鮎も、鮎ちゃんも神さんがつくったんでしょう。それじゃおんなじでしょう」。

鮎子は、このように実際の問題意識をかかえているせいか、自分の疑問を次々と、「キリスト教に詳しい」お姉さんにつける。「どうして神さん見えないの」と鮎子は聞く。長女はキリストの説明は自分がするものと思っているから、話し始める「神さんはね天国にいるから見えないの」。すると、鮎子は聞く「天国は仏さんがいるところじゃないの」。長女「あのね仏さんは、極楽なの」。鮎子「あっ、そうか。だけど、キリストは普通の人でしょう。それじゃ見えるんじゃないの」と鮎子はこういう時はなぜかしつこい。すると長女はだんだんいらいらしながらも答える。「キリストは普通の人じゃないの」。鮎子「だけど筋肉あるんでしょう」。長女は少し閉口しながら「普通の人だけど神さんの子なの」と長女。

次々と質問して来る鮎子に長女は嫌気がさしたのか、「鮎子は本当に自分が魚だったと思っているの」と逆に質問した。「鮎ちゃんが鮎だったこと」と相変らずの鮎子の返事。「スイスにはないけどね、日本にいるとき鮎子がお母さんから生まれて病院にいるところをアルバムで、お姉ちゃんはね、ちゃんと見たんだからね。」「誰が病院に連れて行ったの。鮎ちゃん手術したの」「全然鮎子は分っていないんだから。どうせ大きくなったら分るんだから。分らないとおかしいよ」長女は、あきれてしまった。

神さんによって人間に生まれ変わったと考えている鮎子の考えと、長女と長男の神というものの考え方は少し異なる。例えば、長女・長男は「歯が痛い時に、痛みを取って欲しいと神さんをお願いしたら、ずっと痛みが消えた」という様なものだ。長女と長男の方が、余程日本的といえるかもしれません。

また、長男が「観音様は、キリストのきょうだいなの」と長女に聞く。すると長女は「キリストのお母さんはマリヤでしょう」と答えるが、観音様の事は長女（当時小学校3年生）も知らない。すると鮎子が「観音様もマリヤから生まれたの」と聞くが、長女もテレビの「まんが日本昔話」に出て来る観音さんのイメージしかないのだから

と答えられない。すると鮎子は長女や長男に逆に観音様と、キリストの質問をはじめた。「おにちゃん、イエス様と観音様とどっちが一番好きなの」「うーん、観音様みたいな助けてくれる人が必要なんだよ。イエス様もやさしいひとなんだしな」と長男は話しはじめた。長男や、長女たちが「観音様だ」「キリストだ」と言っている時に、なかなか決らないので「N子(3女)はどっちが好き」と鮎子が聞くと、3女は、えらそうなくちぶりで「好き嫌いしてはいけないの」と食事の時、母親からいつもいわれているものだから、鮎子に向かってそう答えて、子どもたちの観音様とキリストの論争は終わった。

9. 「能動的宗教観」の必要性

こうした子どもらしい会話は、最近の被虐待児の研究が進み、子どもの記憶と空想の科学研究²⁰⁾からその持つ意味を考察することは可能である。またピアジェの児童心理学の業績もある。ピアジェは上述した子どもの考えを「自己中心性」と名付ける。しかし筆者は、ピアジェのように子どもたちの思考を「論理的」視点からのみ分析することは、子どもたちの広い世界観を本当に分析するものでないと批判したことがある。たとえば子どもたちが使っている「神さん」という概念の使い方とかを考えると、その心理的現象は、宗教家のそれに近い働きをしており、それを子どもだから「自己中心的思考」であると考えすることは、現象を否定することにもなりかねない。ピアジェの科学的発達観の問題は、このようにたとえば宗教観の問題を科学的側面からのみ分析(還元主義)するために、観察はすばらしいのに解釈がつまらなくなってしまうところである。

この問題はまた機会があればふれてみたいが、ここは宗教観念の発達の考察を進めているのでこれ以上は取り上げない。²³⁾

話を戻すと、こんな話を聞いていると、子どもの中に、キリストのイメージとならんで観音さんが神のイメージとして意識されているのが分る。

長男の言葉によってもはっきりしているように、彼等にとって、神のやさしい(慈愛)と言う面(自←他)の意識が中心である。また、マリヤと観音の区別がつかないのも日本人的と言えるかもしれない。こんな小さい子が既に、一般にいわれているような日本人的な宗教意識を持っていることに気づいて筆者は驚いた。

しかし、これに対して、スイスの子たち(と言っても人種宗教はいろいろですが、筆者の出合った範囲内で)に接するにつれて、彼等の持つ神のイメージは意識のみならず、行動のレベルでのとらえかたも、日本の子どもたちと違うと思った。例えば、チューリッヒ市内にいる時、長男のクラスにいたトルコ系の子どもたち、ニハット、ムーサ、シノンを家に招待した時、事前に「肉はだめだ」と先生より連絡は受けていたが、「ソーセジ位ならいいだろう」と思って当日、本人たちに聞いたところ「だめ」といってやはり食べなかった。また、ジェンカという女の子は、妹が泣かされると相手が小さい子であってもしかえしに行くので、他の子どもに嫌われていたが、本人に聞くと「やられたらやりかえすのが私たちの教えです」といっていた。彼等を見ていると、宗教というのが、日本の子どもたちがいうような「やさしく、助けてくれる平和な慈愛に満ちた神」ではなく、実際に子どもたちの行動すら規制し、闘いを支えるような怒れる神ともいうべき所があるのには驚いた。

ところで、筆者は、スイス入国当初、家探しの苦勞をしている時、筆者の胸に去来したのはキリストの言葉だった。「天は自ら助ける者を助く」高校時代の英語の関係代名詞の例題で誰もが知っている文だが、自分が探さなければ家族は日本へ帰さなければならぬ。連日、どんなに疲れていても、家族のためにもなお「家主と闘って(?)」「自ら助け」ねばならぬ。ヨーロッパに来て、こんな言葉で自分を励ますとは思わなかった。それが、仏教の言葉でも、お経でもなく、聖書の言葉であったと言うのは、大変不思議だった。それは筆者が不信心な仏教徒であるからというよりも、外国で生活するという状況がそうした現象を生み

出したと考えられる。

つまり、日本の共同体を離れた状況のなかでは、日本的宗教という「自←他」のチャンネルを媒介にする「現世主義的」宗教は、現在所属する共同体の人間関係の存在を前提にするので現実の共同体から自由になったときには、上手く機能しなくなる。そのときは「自→他」という能動的チャンネルが必要になり、共同体の援助がないので神様という「来世的」宗教を持ってきて自分の戦いを支えてもらう必要が出てくる所があるということではないでしょうか。また、外国生活になれて地域の共同体にはいるとまた違うものが見えてくるかもしれないが。

こう考えてくると、法然的な神の概念は、共同体的世界を越える能動的チャンネルを働かせるときに必要になってくるように思われる。「自→他」のチャンネルは、共同体を超える自我の働きを意味するときがある。共同体と個人と神との関係は、ホーソーンの「緋文字」という作品のなかで考察されている。²⁴⁾

子どもたちとの宗教論議は、考えると難しい質問が出て困る事が多いが、例えば「神さんとか仏さんとか、その存在を、自分の全人格で感じとる」能力が、鮎子の発言を聞いていても分るように、むしろ子どもの方が優れており、教えられることが多い。だから、宗教教育は子供の時代になされるべきだと筆者は思っている。

結論的に言うと、日本人の宗教観は「自←他」のチャンネルに依存しており、日本人に多くの安心感を与えてきたように思われる。しかしそれは神の愛を受動的に受けるチャンネルであり、もう一つのチャンネル「自→他」に欠けるところがあるように思われる。その構造的欠陥が、歴史的に作られたことを阿満は論証した。現代のような国際化した時代にあっますます、日本人が共同体を離れて、共同体以外の他人との交際の必要が生じ、共同体以外の他人に対して自分の考えを述べる必要に迫られる時代に、また一人一人の人権を大切にしなければいけない時代には、「現世主義的」「共同体的」「受動的」宗教観では満足できな

い事態が生じ（事例1など）、「来世」をも取り込んだ「能動的」チャンネルによる真の宗教が必要になってきていると思われる。それはなにも外国の宗教に頼らなくても、たとえば法然のような日本の宗教家の中にもいたことを我々に説明したのが阿満の業績のように思われる。

「他界を切り捨てて成立した現世主義には、他界の神に相当する絶対的権威を必要とする必然性があったことだけは、確かである。なぜなら、人間には、もともと他界なしには生きていけない一面があるからだ。人生と世界に究極的な意味を見出すことなくしては、人は生きて行けないのであり、その意味を従来は、他界がになってきた。それが切り離された以上、世界と人生を最終的に意味づける根拠もまた、現世にもとめられることになるのは、当然であろう。このようにして、現世に要請される秩序は、宗教性を帯びてくる。もっとも、現世の神は、所詮他界の神ではない。その超越性は、他界の絶対者ほどに強くはない。そこに依然として、他界の復権の可能性もある」²⁵⁾

文 献

- 1) フロイト 「幻想の未来」 日本教文社 1967年 p74
- 2) 阿満利麿 「日本人はなぜ無宗教なのか」 筑摩書房 1996年 p11
- 3) 阿満利麿 前掲書 p70-76
- 4) 山添正 「父性のたてなおし、母性のみなおし」 ブレーン出版 1997年 p59
- 4) 阿満利麿 前掲書 p77
- 5) 阿満利麿 前掲書 p78
- 6) 阿満利麿 前掲書 p81
- 7) 阿満利麿 前掲書 p101
- 8) 阿満利麿 「国家主義を越える」 講談社 1994年
- 9) 阿満利麿 「日本人はなぜ無宗教なのか」 筑摩書房 1996年 p103
- 10) 阿満利麿 前掲書 p104
- 11) 阿満利麿 前掲書 p110-111
- 12) 阿満利麿 前掲書 p112
- 13) 阿満利麿 前掲書 p117
- 14) 阿満利麿 前掲書 p118

- 15) 阿満利磨 前掲書 p132-133
- 16) 阿満利磨 前掲書 p133-134
- 17) 阿満利磨 前掲書 p136
- 18) 渡辺恒夫 「輪廻転生を考える」 講談社 1996年
- 19) 山添 正「日本の子どもの宗教観」小児看護 16
巻6号 ヘルス出版 p866-867
- 20) 葛野浩昭「サンタクロースの大旅行」岩波書店
1998年
- 21) Jung, C, G Two essays on analytical psychology The Collected Works of C, G, Jung, Volume 7 Princeton University Press
1969
- 22) Loftus, E The myth of repressed memory
St. Martin's Griffin 1994
- 23) 山添 正「子ども学入門ー子どものファンタジー
の世界の心理学的アンソロジー」ブレーン出版
1993年 p1-6
- 24) ホーソン「緋文字」岩波書店 1955
- 25) 阿満利磨 「国家主義を越える」 p160